国宝・重要文化財
文教の精神を伝える 閑谷学校（しずたに）

寛文６年（1666）、池田家の墓所を検分するために和気郡木谷村（現・備前市閑谷）を訪れた岡山藩主池田光政は、この地が閑静で勉学にいそしむには最適な場所と考え、津田永忠（ながただ）に庶民のための学校建設を命じました。その２年後、学校は各地の手習い所の一つとしてスタートをきりますが、当初は茅葺き屋根の簡素な建物でした。

その後、寛文 12 年に光政から閑谷在宅を勧告された永忠は、学房・飲室、茅葺きの講堂を設けるとともに、領内を巡回して手習所の趣旨を督励しました。そして延宝８年（1680）、永忠は講堂の茅葺きを黒瓦に改め、文庫を設けるなどして、学問所としての体裁を整えています。

綱政の信任を得て再び岡山城下に移った永忠は、百間川の築堤や幸島の新田開発、牛窓湊の波止の築造、御後園（後楽園）の造営、京橋・中橋・小橋修理など多くの土木事業に関わりながら、貞享元年（1684）には学問所の聖堂を再建しています。元禄 11 年（1698）から３年かけて講堂の大改築をはじめ避火山（ひよけやま）・石塀・鶴鳴門（かくめいもん）と、学問所としての体裁を次々に整えていきました。この時に屋根瓦を備前焼瓦に葺きかえています。永忠の意気込みは相当なもので、西大寺をはじめ各地から宮大工の棟梁たちを呼び集め、学校南側の街道沿いには備前焼瓦を焼く窯場から休むことなく煙があがり、突貫工事で進めていたそうです。

閑谷学校の建築物で最も重要な講堂（国宝）は、桁行７間、梁間６間、入母屋造りで周囲に回廊をめぐらし、扉や内部の木組はすべて拭き漆に仕上げられています。また、その内部は十本の欅の丸柱で支えた内室と、その四方を囲む入側（いりがわ）とで成されており、内室の北の小壁には綱政が書いた「定」の壁書があります。

宝永元年（1704）、65 歳になった永忠は隠居願を出して閑谷に移住します。学校の将来を案じた光政の遺言に余生を捧げたとも言える終の住処でした。

■位置図

閑谷学校の校門
二層三つの屋根が社殿風の威容を誇る。開閉の際、鶴の鳴き声に似た音を出すので「鶴鳴門」とも呼ばれる。

講堂の内部
10 本のケヤキの円柱の外側が庇の間、内側が内室。

国宝「閑谷学校講堂」
紅葉した楷の木と講堂。創建当時茅葺きだったが、備前焼瓦に葺き替えられた。

講堂の回廊
柱、花頭窓、屋根の鳥ぶすまなど、直線と曲線の調和が美しい。

石塀
閑谷学校を取り巻くかまぼこ型の石塀は総延長 765 m。